

同人雑誌評は、同人誌に作品を発表している人たちにとっては、常に気になる存在である。自分の作品がとりあげられているか、自分たちの同人誌が紹介されているか。とりあげられていれば歓喜し、とりあげられていなければ思わず評者をこき下ろしたくなる。

最近是他誌の同人雑誌評（「季刊文科」88号）も気にかかり、のぞいてみたら、冒頭に長々と持論を展開し、同人誌作品は持論のためのダシのように扱われているものもあり、おやおやと思った。

おびただしき小さな苦しみを描写した物語や大衆の小さな犠牲や小さな死のなかで、生きのびるための苛酷な物語に私は惹きつけられた。

「朝」43号（東京都）

小説五篇、特集エッセイ「それぞれのコロナ禍ふたたび」、それに寄稿評論として三島由紀夫論が二つ掲載されている。この中で圧巻なのは「メルヘン」（松田祥子）である。ピンクサロン「メルヘン」で働く「私」の日常がこまごまとつづられている。「職業に貴賤はない」と

いう言葉はあるが、多くの人が就いている職業によってその人間の価値

までをも決めてしまうという風潮は依然根強い。まして周囲に性産業に従事していることが知られたら、偏見の嵐の中で生活するようなものだ。

しかしすぐれた文学作品は、どんな境遇の間でも、その一人一人の心情を見つめることの大切さを教えている。「私」は老人ホームのヘルパーをしていたが持病のため辞めざるを得なくなり、ピンクサロンで働くまでの経緯がつづられる。そして、その具体的な仕事内容が事細かく描かれる。そこで仲良くなった同僚や客とのやり取りもリアルに描かれている。同僚リサと仕事帰りに寄った午前3時のうどん屋での会話。

「細野さんが来ると、ちよっと恋人気分になる」
著でうどんなの上ののった油揚げを押すと、澄んだつゆに、濃い茶色の汁が流れ出た。
「ナナってバカだね」
リサが小さく溜息をついた。
「そうかな。でも、細野さんってね、酸素ボンベみたいなの」
「酸素ボンベ？」
「そう、一緒にいると、楽に息が出来る、安心なの」
細野さんと隠れてデートしていたが、奥さんが疑っているからもう会えないと細野さんにいわれる。
「どうして」
口でそう言った時には、もう私の毛羽立った感情にはぬるいコーティングがかかっていた。そういう日があるのはわかってきた。急でびっくりしないように、私の中には「仕方がない」の小箱が、前から準備してあった。

このように主人公の諦めと慎しやかな切ない心理が巧みに表現され、読者にじんわりと伝わってくる。

朝 43

朝

それぞれのコロナ禍 ふたたび
三島由紀夫論 二編

「文芸エム」9号（滋賀県）

巻末に「生きる武器としての文学」という文章を掲げ、理念高い志を感じさせる。特集・評論では、ジブリ映画「風立ちぬ」や映画「ブレ



ドラランナー」がとりあげられ興味深い。小説は七篇掲載されている。この中で注目したのは、「登女の残像」（山上この葉）である。登女とは「私」の義母の名で、残像とは遺影を指している。義母の介護のために役所を辞めた「私」の日常が、冷酷とも思える乾いた筆致で描かれている。

飲むタイプの痛み止めが効かないときには、外科医みたいなピッチピチの薄い手袋をして、登女の肛門に坐薬を挿入する。昔むかし、高熱を出した我が子の白桃のようなお尻に解熱剤を入れて以来の作業。白桃とは似ても似つかない、ドライフルツのような登女の肛門に狙いを定め、「さあ、入れるよっ」と声をあげる。「私」は、気分転換をすすめられ、都心のカルチャーセンターの文章教

室に通い小説も書いてみる。小説中小説としてその作品もはさまれ、「私」の女としての生きざまがシニカルかつユーモラスに描かれている。

「追伸」12号(愛知県)

この誌はウクライナ問題からピートルズまで、様々なエッセイと、小説二編。「平城山」(山下智恵子)は着想のおもしろさに惹かれた。時子はSNSを駆使して「本当は七四歳なのに、四〇代バツイチ女性と、ひどくサバをよん」で男と会う約束をする。その約束した名古屋駅構内の描写から始まる。「少々、いやかなり若作りで、ふつうはほとんど身につけないオレンジ色のワンピースを着てきた。」

夫を、まるで人間廃業した物体のように、施設に預け、時間を持て余している七〇代の老女という現実から、ついと身を隠してみたかった。(中略)文字で、平気であそをつく自分を発見して新鮮だった。果たして約束をした男をうまくだますことはできたのか。

「たまゆら」124号(京都府)

この誌は、様々な形のランプが並



ぶポップな絵が表紙を飾っている。エッセイ、詩、俳句、小説、八コマ漫画、同人誌寸評まであるバリエーション豊富な同人誌だ。著者紹介に好きな映画を加えるなど、編集者の工夫が感じられる。

「道外れ」(那村洵吾)は巧みな短篇だ。夫の、子どもに対する暴力に耐えかねた「私」が、幼い娘を連れて家出し、海辺の田舎駅に降りる。そこは「私」が高校生まで生活していた場所で、その後一度も帰っていなかった。理髪店の前で娘が突然「私」に髪を切ってほしいといい、理髪店にいた女性に誘われて店内に入る。鏡に映った三四歳の顔と「私」は向き合う。実はそこは、かつての恋人が経営している理髪店だった。やがて元恋人が出てくるのだが、こうした展開のうまさに読者はおのず

と惹きつけられていく。

「文学伝習所北へ」終刊号(山形県)

この号は、長年同誌の編集・事務局に携わっていた河内愛子の追悼号である。この中で衝撃を受けたのは、記録「二〇二一年三月十一日のこと」(斎藤恵子)である。東日本大震災の時、福島県いわき市の高校の女教師が、三階の教室でたまたま一人であった時に「気象庁のデータでは、いわき市は最大深度6弱で震度4以上が百九十秒間つづいた。」時の体験記である。十二年前のことが、あたかもつい最近の出来事であるような臨場感が伝わってくる。

「そもそも自分が立つ教室棟の廊下は、東へ向かってまっすぐにハクラス分。七、八十メートルあるが、それが三百人分のロッカーと一緒に、巨大な爬虫類の尻尾のように左右に揺れている。(中略)方向がバラバラの予測不能な揺れの中、あちこちから大きくきしむ音が鳴り、加えて、右手、教員棟への連絡通路の防火扉がボンと音を立て、目の前で閉じた。防火扉が閉じてても、通過用の小さなドアが扉自体についている。

そのドアを通過して(略)」と、当時の忘れられない記憶が緻密に描かれ、その恐怖が読者に伝わり、いやおうなしに引きこまれていく。

「金縛り」(中山茅集子)は「ベッドに眠る私の両脇下にそろりと手が入る。大きな掌が入り込むと同時に真っ黒なからだのしかかる。」何やら思わせぶりの書き出しだが、これは主人公が金縛りにかかった時の描写である。体調が悪く、「頭の中に何やら詰め込まれているようで、ボクシングジムにぶら下がるサンドバックを連想した。」主人公は「九一歳を目前にした完全な老女」だが、女性ケアマネジャーの「自律神経に効くマッサージの先生がおられるんですよ、それも四十代のイケメンなの」という言葉にのせられたりとユーモラスに描かれたりする。解散して久しい読書会の仲間が電話をしてきて、二年前前に死んだはずの読書会のリーダーを病院で見かけたということからミステリアスなドラマが始まる。いるはずのない友人の面影が、読者の前にも徐々に立ち現れてくるといふ巧みな短篇だ。



「佐賀文学」38号(佐賀県)

編集後記に、長らく代表をしていた人が辞めるのを契機に廃刊することになったが、存続したいという同人有志によって、再度立ち上げたという。これは遅かれ早かれ、多くの同人誌が抱えている問題である。詩、随筆、小説四篇が並ぶ。

「タンポポはタンポポとして」(樋渡喜美子)は、「私」の夫が、「去年の暮、初恋の女だという鈴子と、八十からの余生を暮らそうとこの町を出た。」それから半年を暮らした屈折した心情がにつづられている。周囲の反応として久しぶりに会った同級生は「東京あたりじゃないの?踏み込んでやいなさいよ!」

「あなた踏み込んできているんじゃないの、言ってやりたいくらいめめた夫婦関係がシニカルにそして

いだった。

夫に対しては、低姿勢で接していた隣家が夫が「家を出た途端、あからさまに態度を変えた。」と不愉快なことに憤る。「私」は夫との出会いやさまざまな夫との思い出にふけりながら、今後は自由に生きていくと決心するという短篇だ。

「樹林」68号(大阪文学学校通信教育部作品集・大阪府)

この誌は、同人誌というより、校内誌といった性格が強い。小説、エッセイ、詩といった生徒の作品が数多く並び、巻末には講師による推薦作寸評が掲載されている。この中で私がおもしろく読んだのは、「穴掘る人」(吉野さらさ)だ。主人公「香苗」の夫が、シヤベルで庭に穴を掘りだした。「既に直径数十センチの穴が掘られているが、まだまだ掘り返していく。」何のための穴か聞いても夫は答えないだろうと予測し、冷めた目で見ている。「子どもも巣立っていつて、夫婦二人きりの結婚生活三十年目、香苗の学習の成果だ。もう無駄な労力は払わない。」この冷めた夫婦関係がシニカルにそして

「飛行船」28号(徳島県)

今号は小説が八篇に評論、随筆も並んでいる。その中には「となりの同人誌」と題して、簡単な同人雑誌評もある。ここでは「赤い自転車」(正木孝枝)に注目した。昭和四十年代の小学二年生の「祥子」の視点で、社会全体が貧しいながらも地方の牧歌的な生活が描かれている。そんな中、高校生ぐらいの男に性的い

たずらをされたことで心理的に追い詰められる。被害にあったことを話せば、自分の不注意が責められると思ひこみ、誰にも話せない。男はどこかで自分を見ているという恐怖感から、にわかに心理サスペンスの様相を帯びてくる。



しては弱く、物足りなかったのが残念。



「アピ」13号(茨城県)

この誌は小説、エッセイ、短歌、川柳、詩歌と並び多様である。この中でエッセイ『「アルス」とともに生きています』(鯉淵康子)は、夫が58歳でとつぜんALS(筋萎縮性側索硬化症)と診断された前後の体験記である。ALSは、脳から筋肉への指令が途絶えてしまい呼吸もできなくなる、原因不明で治療方法もない難病だ。コミュニケーションがとれなくなる。「なにが訴えているが理解できず、痰?ウンチ?オシッコ?熱いの?と聞くが、...浩次の思いは『痰を早く吸引してくれ!』とやっとなかりました。」夫婦や家族の笑顔の写真が添えられた懸命に生きる記録に惹きつけられた。